

動詞接辞-i/-hi/-li/-ki
の派生方向と動詞の意味クラスの関連付け—韓国語
の語彙的使役および受身教育の観点から—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-04-13 キーワード: 作成者: 崔, チョンア メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00057382

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



動詞接辞*-i/-hi/-li/-ki*の派生方向と 動詞の意味クラスの関連付け

—韓国語の語彙的使役および受身教育の観点から¹—

崔 チョンア

0. はじめに

日本語の使役と受身は、それぞれ「-(s)ase」と「-(r)are」という異なる形式が使われる。それに対して、韓国語の使役と受身は、語彙的形式において使役²および受身の両形式が動詞接辞*-i/-hi/-li/-ki*³によって表現される。現行の学校文法では、このような特徴が生じる理由について触れることがないため、日本語を母語とする韓国語学習者にとって混乱を招きやすい。

そこで本稿では、韓国語の動詞接辞*-i/-hi/-li/-ki*の派生方向と動詞の意味クラスの関連付けについて、語彙的使役および受身の教育の観点から従来の研究を再考察し、学習上の困難を解消することを試みる。

¹ 本稿は、崔(2019a)を発展させた朝鮮語教育学会第80回例会口頭発表(2019年3月9日、近畿大学)の原稿に加筆したものである。学会参加者の皆さまから頂いた貴重なご指摘・ご意見に感謝申し上げます。

² 韓国語の使役形式は、動詞接辞によるものと、*-key hata*によるものがある。前者を単形・直接・語彙的ということもあり、それに対して後者はそれぞれ長形・間接・生産的という言い方をする。本稿では、前者を語彙的使役、後者を生産的使役と呼ぶことにする。

³ 学校文法で主に扱われている動詞の使役接辞は*-i/-hi/-li/-ki/-wu/-kwu/-chwu*の7つであるが、その他*-ukhi/-ikhi/-ay*がある(国立国語院(2017))。なお、受身としても使われるものは*-i/-hi/-li/-ki*の4つである。

1. 問題設定

崔(2019a)では、鄭(2008)による「派生の方向から見たヴォイス・カテゴリーの連続性」という言語学的分析結果に基づいて「接辞-*i/-hi/-li/-ki*の派生構造」をよりシンプルな形にし、派生の意味クラスによって接辞-*i/-hi/-li/-ki*が使役と受身の2つの役割を弁別的に担っていることを示した。そして、初中級の段階⁴での語彙レベルの使役と受身の同時学習の必要性について論じている。しかし、派生の方向を意味する「自分の領域内または外に納まる行為」という「内」と「外」の概念は、韓国語母語話者の直観に頼る部分が多く、具体的な説明が欠けていた。

他方、鄭(2010)では、プロトタイプ理論に基づく Pulman(1983)や Taylor(2003)の基本レベルの上位カテゴリー⁵を発展させ、動詞の8つの上位カテゴリーを設定⁶した。そして、それぞれのスキーマを提案し、他動性の様々なカテゴリーの内部構造を明らかにしている。

本稿では、まず崔(2019a)で設定した初中級レベルという制限を外し、「接辞-*i/-hi/-li/-ki*の派生構造」の再考察を行う。そして、鄭(2010)が仮定する「述語タイプ」の種類とそのスキーマを援用し、動詞の意味クラス別に見られるスキーマと共通する「述語タイプ」から、その内部構造を明らかにし、さらに派生方向との意味関係を究明することを目的とする。

次節では、鄭(2008)と崔(2019a)の分類を援用しつつ、韓国国語院(2017)のハングル正書法(4章2節22項)による項目も取り入れ、延べ154個⁷の動

⁴ ハングル能力検定試験の4級程度を指す。

⁵ 動詞をカテゴリー化するに当たって Pulman(1983)では、最上位語に DO と BE があるとし、DO の下位カテゴリーとして act, become, cause, make, move, say を置き、これらを原始要素の動詞と呼んでいる。なお kill は、cause の下位カテゴリーに属する基本的レベル(basic object level)の動詞である。

⁶ 鄭(2010)では Pulman や Taylor で言う原子要素の動詞に位置するカテゴリーを ACT/ACT ON, BE, BECOME, CAUSE, GIVE/GET, HAVE, MAKE, MOVE と設定し、「述語タイプ(predicate type)」と呼んでいる。本稿も同様の呼び方を取り入れる。

⁷ 本稿では、本題の複雑さを避けるため、매달다(ぶら下げる・吊る), 줄라매다(きつく締

詞および形容詞を紹介する。そして、本稿の考える述語の意味クラスについて述べることにする。

2. 派生の方向と動詞の意味クラス

鄭(2008)では、(i)動作動詞か(ii)非動作動詞か、さらに(i)と(ii)のそれぞれに接辞*-i/-hi/-li/-ki*を付加したときに対応する使役形の有無によって動詞の分類を行った(鄭(2008; 137-138)を参照)。表にまとめると以下ようになる。

表 1. 動詞分類

派生に関与する動詞	(i) 動作動詞 (active verbs)	使役形がある	他動詞 A, 自動詞 A
		使役形がない	他動詞 B
	(ii) 非動作動詞 (inactive verbs)	使役形がある	自動詞 B1, 形容詞
		使役形がない	自動詞 B2
派生に関与しない動詞	漢語動詞, その他の他動詞, 自動詞など		

2.1. 派生に関与する動作動詞

まず本節では派生に関与する(i)動作動詞における意味クラスを分析する。

2.1.1. 「*-i/-hi/-li/-ki*による使役形がある」タイプ

以下は、鄭(2008, 138)と崔(2019a, 85)の分類に基づき、本稿によって再考察された動詞の意味クラスである。本稿では、語彙的使役における派生方向の全体図を把握する意図から、使役のみで表れる「*-wu/-ku/-chwu*」のような接辞もタイプの中に加える⁸ことにした。

める)のような複合動詞は扱わず、主に매다(縛る・結ぶ),달다(ぶら下げる・付ける),조르다(締める)のような単一動詞を対象に検証する。本稿の154個の単一動詞は、語彙的使役および受身にかかわる派生動詞のほとんどを網羅している数である。

⁸ (1)', (2)'のように加えている。以下、その他の意味クラスについても(・)'を用いて

・他動詞 A タイプ :

- (1) 「-i」 깎다(値切る, 散髪する), 먹다(食べる), 보다(見る), 쓰다(被る),
 훔다(なめる), 「-hi」 씹다((ガムを)噛む), 엮다(おんぶする), 읽다(読む),
 입다(着る), 잡다(掴む), 「-li」 듣다(聞く), 들다((自分の)手に持つ), 물다(啜
 える), 알다(知る), 「-ki」 감다((自分の髪のを)洗う), 긁다(食事を抜く),
 넘다(越す), 뜯다(食む, かじる), 맡다(預かる), 벗다(脱ぐ), 빗다((髪を)と
 かす), 신다(履く), 씻다((自分の体を)洗う), 안다(抱く)
- (1)' 「-wu」 끼다((自分の指に)はめる), 이다((頭に)載せる, 担ぐ), 지다((背中に)
 担ぐ)

・自動詞 A タイプ :

- (2) 「-i」 놀라다(驚く), 「-hi」 눕다(横たわる), 앉다(座る), 「-li」 걷다(歩く),
 날다(鳥が飛ぶ), 놀다(遊ぶ), 울다(泣く), 오르다(場所に)上がる),
 「-ki」 숨다(隠れる), 웃다(笑う)
- (2)' 「-wu」 서다(立つ), 자다(寝る), 타다(乗る)

(1)と(1)'の他動詞 A タイプには, 視覚・聴覚・知覚, 着脱動詞, 身体手入
 れ動詞, 消化動詞など, 再帰性を持つ動詞が中心にある。この再帰性の特徴
 を用いて, 鄭(2008;138)では「自分の領域内に行為が収まる」動詞⁹として捉
 えている。よって, 他動詞 A の派生形を[他動詞 A]'で表すとすると, 他動
 詞 A の「自分の領域内に行為が及ぶ」という特徴は, -i/-hi/-li/-ki によって[他
 動詞 A]'¹⁰の「自分の領域外に行為が及ぶ」という特徴を導き出し, 互いの
 意味特徴が対立する対応関係を示すことになる(図 1 参照)。

また, (2)と(2)'は, 自動詞の動作動詞であるため, 主語が動作主であり,
 その動作が動作主本人を動かすことになる。つまり, 再帰性構文に似た構文
 が生じていると考えられる。そのため, (3a)のように主語が動作主と見なさ

加えている。

⁹ 鄭(2008;138)では類似した概念として Haiman(1983)の「求心動詞(Introverted verbs)」も
 紹介している。

¹⁰ [・]' は, 接辞-i/-hi/-li/-ki による活用と見なす。例えば, [입다(着る)]' = 입히다(着せ
 る)

・他動詞 B タイプ :

- (4) 「-i」 꺾다(折る), 나누다(分ける), 낚다(釣る), 놓다(置く), 닦다(磨く), 덮다(被せる), 모으다(集める), 바꾸다(換える), 쌓다(積む), 섞다(混ぜる), 쓰다(使う), 쓰다(書く), 짜다(編む), 차다(蹴る), 치다((車などで)ひく), 파다(掘る), 퍼다(しわを伸ばす), 「-hi」 건다(取り立てる), 닫다(閉める), 막다(塞ぐ), 묻다(埋める), 박다(釘を刺す), 밟다(踏む), 뽑다(抜く), 얹다(上に載せる), 접다(畳む), 찍다(印を押す,撮る), 「-li」 갈다(替える), 깔다(敷く), 걸다(掛ける), 널다(洗濯物を干す), 누르다(上から下へ押す), 달다(付ける), 달다(ぶら下げる,吊るす), 뚫다(突き抜く), 밀다(左右前後かに押す), 벌다(稼ぐ), 부르다(呼ぶ), 열다(開ける), 찌르다(刺す), 자르다(切る), 팔다(売る), 풀다(解く), 흔들다(揺らす), 「-ki」 감다(巻く), 끊다(切る), 담다(盛る), 뜯다(剥がす,ばらす), 매다(縛る), 맺다(結ぶ), 찢다(破る), 뺏다(奪う), 삶다(煮る), 엮다(縛る,絡げる), 쫓다(追う), 조르다(締める)

動作動詞のうち-i/-hi/-li/-kiによる使役形がない他動詞 B タイプは、共通の意味特徴として、主語が動作主となり、対象に向かって動作を加えるようなものである。鄭(2008)ではこのような特徴について「自分の領域外に行為が及ぶ」動詞という捉え方をしている。したがって、他動詞 B の-i/-hi/-li/-kiによる派生形を[他動詞 B]'とすると、他動詞 B の「自分の領域外に行為が及ぶ」という特徴は、[他動詞 B]’の「自分の領域内に行為が及ぶ」という特徴を導き出し、互いの意味特徴が対立する対応関係を示すことになる(図 2 参照)。

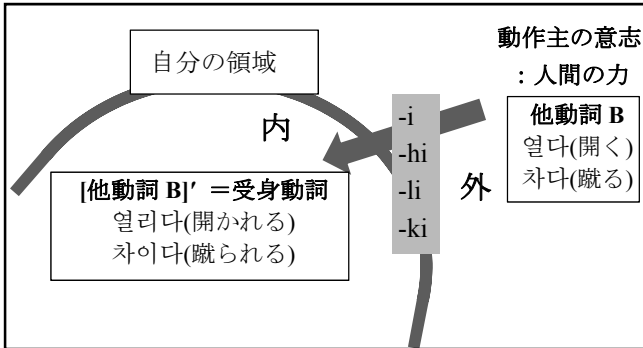


図 2. 他動詞 B と [他動詞 B]' との対立構図

これは、図 1 で示す他動詞 A・自動詞 A_有とは対称的に反対方向へ、つまり *-i/-hi/-li/-ki* が受身の形式として使われることになる(図 3 参照)。

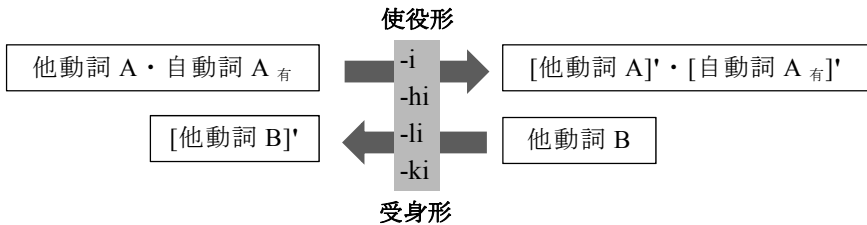


図 3. (i) 動作動詞における派生の方向の全体図

2.2. 派生に関する非動作動詞

まず本節では派生に関する(ii)非動作動詞における意味クラスを分析する。

2.2.1. 「*-i/-hi/-li/-ki*による使役形がある」タイプ

・自動詞 B1 タイプ :

- (5) 「*-i*」 끓다(沸く), 끝나다(終わる), 나다((涙が)出る), 나타나다(表情などが現れる), (냄새가)나다((匂いが)する), 녹다(溶ける), 들다((シミなどが)入

る), 불다(くつつく), 속다(騙される), 죽다(死ぬ), 지나다(過ぎる), 「-hi」
 삭다(朽ちる, 発酵する), 썩다(腐る), 식다(冷める), 「-li」 날다(埃が飛ぶ),
 늘다((量・数など)増える), 마르다(乾く), 살다(生きる), 얼다(凍る),
 오르다(上がる), 부풀다(膨らむ), 분다(水ぶくれする, 増す), 「-ki」 옮다(風邪・癖などが移る)

- (5) 「-wu/-ywu」 깨다(起きる), 뜨다(浮く), 비다(空く), 지다(消す), 차다(満ちる),
 크다(育つ, 大きくなる), 타다(燃える), 피다(咲く), 「-kwu」 달다(暑くなる),
 돌다(感情などが沸く), 솟다(力などが沸く), 「-chwu」 늦다(遅れる),
 맞다(当たる), 「-ukhi」 일다¹¹(生ずる, 起こる), 「-ay」 없다(ない)¹²

・形容詞タイプ :

- (6) 「-hi」 괴롭다(苦しい), 굳다(堅い), 굽다(曲がっている), 넓다(広い),
 높다(高い), 더럽다(汚い), 밝다(明るい), 붉다(赤い), 좁다(狭い)
 (6) 「-chwu」 곧다(まっすぐだ), 낮다(低い), 늦다(遅い)

(5)の自動詞 B1 は対象物の状態変化, または対象物の位置変化を表す変化動詞であり, (6)の形容詞は物の性質を表す属性形容詞である。この2つ

¹¹ 「일다(生ずる, 起きる)」に対応する派生動詞には「일-으키-다(引き起こす)」がある。(i a) を使役他動詞構文と見れば, (i b)はその主動構文になる。しかしながら, (ii a) に対しては(ii b)が成り立たないことから「일으키다(起こす)」は単純に他動詞として扱われている。本稿では「일으키다(起こす)」について, ①韓国の国語辞典に「일어나게 하다(起きるようにする)」と定義されていることや, ②(i b)のような主動構文を有することから, 派生方向による使役形として「일으키다(起こす)」を認め, 「일다(生ずる, 起きる)」を(5)の意味クラスに加えておく。

- i a. 그가 파문/경련을 일으켰다.(彼が波紋/けいれんを起こした。)
 b. 파문/경련이 일어났다/일었다.(波紋/けいれんが起きた。)
 ii a. 그는 무거운 몸을 일으켰다.(彼が重い身体を起こした。)
 *b. 무거운 몸이 일어났다/일었다.(重い身体が起きた。)
 c. 그가 *일었다/일어났다.(彼が起きた。)

¹² 日本語の「ない」の派生動詞である「なくす」による構文は, 語用論的に「恋人を亡くす」「財布を無くす」のように, 主語の非意図的状況も, 「ゴミを無くす」のように, 意図的状況も可能である。他方, 韓国語の「없다(ない)」に対応する「없-애-다(なくなるようにする)」による構文は, 「사람을 없애다(人を無くなるようにする=殺す)」「쓰레기를 없애다(ゴミを無くす)」のどちらも主語が動作主となる使役構文を作る。

の意味クラスは、-i/-hi/-li/-kiによって、状態や位置、程度を変化させる動作主を主語として取り、状態や位置、程度が変化する被動作主を目的語として取る使役他動詞構文、または使役構文を作ることになる。(7a)(8a)に対して(7b)(8b)(8c)がその例である。

なお、(8b)の部屋を「広くした」は工事による「状態変化」であるのに対し、(8c)の前の家から新しい所へ引っ越すことによる部屋を「広くした」ということは「移動の変化」として捉えることができる。

- (7) a. 소비세가 올랐다. 主動, 自動詞 B1
(消費税が上がった。)
- b. 정부가 소비세를 올렸다. 使役, [自動詞 B1]'
(政府が消費税を上げた。)
- (8) a. 방이 넓다. 主動, 形容詞
(部屋が広い。)
- b. 공사로 아이 방을 넓혔다. 使役, [形容詞]'
(工事で子供の部屋を広くした。)
- c. 친구가 방을 넓혀서 이사했다. 使役, [形容詞]'
(友達が部屋を広くして(=部屋が広い所に)引っ越した。)

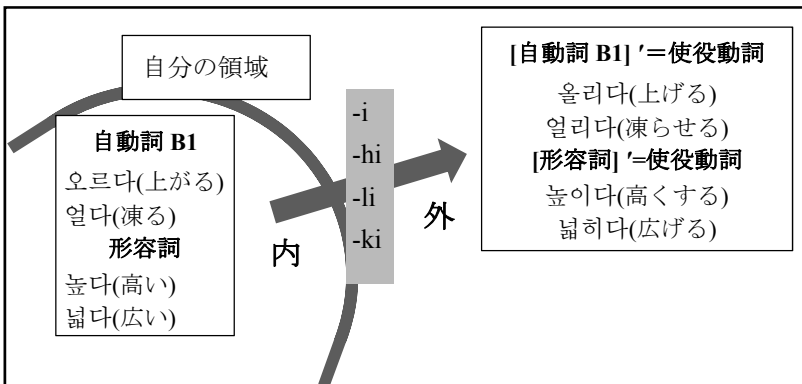


図 4. 自動詞 B1・形容詞と[自動詞 B1]'・[形容詞]'との対立構図

動作動詞である他動詞 A や自動詞 A_有の再帰性が「自身の領域内に行為が収まる」という概念を導き出したとすると、非動作動詞である自動詞 B1・形容詞では、主語となる対象物自身の状態・移動の変化や程度自体が「自身の領域内に行為が収まる」という概念に対応していると言える(図4参照)。

2.2.2. 「-i/-hi/-li/-kiによる使役形がない」タイプ

・自動詞 B2 タイプ：

(9)개다(晴れる), 굶다(膿む), 걷다(雲が晴れる,梅雨が明ける), 감기(가) 들다(風邪を引く), 신이 들다(神がのりうつる), 열다(実が実る), 졸다(居眠りする), 동이 트다(夜が明ける)

(9)のクラスは, 개다(晴れる)－*개이다¹³(晴れられる), 걷다(晴れる)－걷히다(晴れられる), 굶다(膿む)－굶기다・(旧)굶기다(膿まれる), 열다(実が実る)－열리다(実が実られる), 동이 트다(夜が明ける)－동이 트이다(夜が明けられる), 감기(가) 들다(風邪を引く)－감기(가) 들리다(風邪を引かれる), 신이 들다(神がのりうつる)－신이 들리다(神がのりうつられる)のように, 개다(晴れる)を除く全てに -i/-hi/-li/-ki によって対応する派生動詞が存在する。しかし, その対応するものとの意味的な対立が生じていないという特徴を持っている。

特に, 굶기다(膿まれる), 동이 트이다(夜が明けられる), 감기(가) 들리다(風邪を引かれる), 신이 들리다(神がのりうつられる)による構文は, 形式的に受身構文を作るのであるが, 無情物を主語とし, 外部要因として自然や神の力のみが関与するため, (10a)と(10b)は, 能動文－受動文のような意味の対立を成していないのである。

(10) 동이 a.났다./b.트였다. (夜が a.明けた。/b.明けられた。)

¹³ 韓国語の標準語において개이다(晴れられる)は, 개다(晴れる)の誤用と判断される。개이다(晴れられる)が誤用と判断されるようになった理由には, 意味の非対立がその背景にあると考えられる。他方, 北朝鮮では受身形として認められている。

(11b)のように「열리다(実られる)」に対する特別な外部要因が自然の力であれば, (10)と同様に意味の対立がなくなり, (11a)열다=(11b)열리다(実が実る)になる。

(11) a. 사과가 맛있게 열었다.

(リンゴが美味しく実った。)

b. 사과가 (自然の力によって) 맛있게 열렸다.

(リンゴが美味しく実られた=リンゴが美味しく実った。)

他方, (12)の父親のように人間の力が表れると, (12a)のような構文の許容度は低く, (12b)が自然な構文であり, (12b)(12c)は同様の構文になる。そのことから, (12b)の「열리다(実られる)」は受身構文と捉えられる。しかし, 「만들어지다(作られる)」による受身構文(12c)は, (13c)のように対応する能動文を持つのに対し, 自動詞「열다(実が実る)」を用いて(12b)には対応する能動文を作ることができないのである((13*b)参照)。

(12) 아버지의 힘으로 맛있는 사과가 a. 열었다./b. 열렸다./c. 만들어졌다.

(父の力で(品種改良などによって)美味しいリンゴが a.実った/b.実られた/c.作られた。)

(13) 아버지가 맛있는 사과를 a. 열게 했다./*b. 열었다./c. 만들었다.

(父が美味しいリンゴを a.実るようにした/*b.実った/c.作った。)

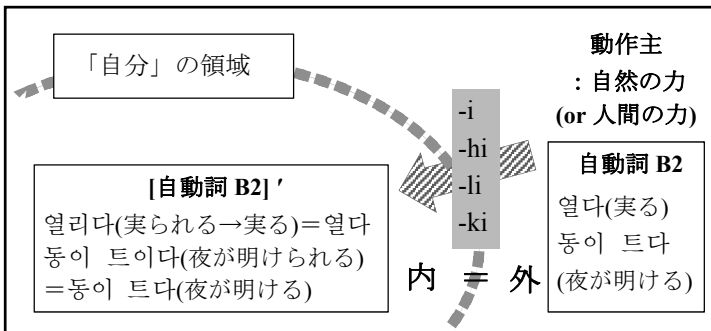


図 5. 自動詞 B2 と[自動詞 B2]'との構図

以上から、派生方向とは、「自分の領域内に行動が納まる」と言うのが受身性として、「自分の領域外に行動が及ぶ」というのが他動性～使役性として表れる動作や変化の振る舞いを指すものであり、そして、表2のような動詞の分類は、「派生方向による動詞の意味クラス」であるということが分かった。次節では、プロトタイプ理論に基づいて、2節で分析した意味クラスの内部を考察する。

3. 派生方向の内部構造

鄭(2010)では、Pulman(1983)やTaylor(2003)の考え方を発展させ、動詞の上位カテゴリー¹⁴として ACT/ACT ON, BE, BECOME, CAUSE, GIVE/GET, HAVE, MAKE, MOVE を設けている。そして、このカテゴリーのそれぞれが持つ事態をパターン化したスキーマを提案している。3.1では、鄭(2010)が仮定する動詞の上位カテゴリーと、そのスキーマおよびスキーマに書かれる記述用語の言語的記述を紹介する。

3.1. 述語タイプと基本的スキーマ

(14)は、鄭(2010)で動詞の上位カテゴリーとして設けられている「述語タイプ」であり、そして(15)は、その「述語タイプ」別に提案されているスキーマの中、MAKEタイプを用いたものである。

(14) 述語タイプ

MAKE, CAUSE, GIVE/GET, HAVE, ACT/ACT ON, MOVE,
BECOME, BE

(15) 鄭(2010)で提案した MAKE タイプのスキーマ

MAKE₁ : ACT ON_{x,m} - BECOME_y - BE_{y,z} - HAVE_{x,y}
(創作物の作成₁ : 制作物が創作者に帰属する場合)
MAKE₂ : ACT ON_{x,m} - BECOME_y - BE_{y,z}

¹⁴ 本稿でも鄭(2010)と同様、「述語タイプ」と呼ぶ。

(創作物の作成₂ : 制作物が創作者に帰属しない場合)

(16) 本稿の分析に使われる MAKE タイプのスキーマ

MAKE : ACT ON_{x,m} - BECOME_y - BE_{y,z}

MAKE に属する動詞「짓다(作る・建てる・仕立てる,etc.)」と、それに対向する「만들다(作る・製造する・製作する,etc.)」について考えよう。例えば, ‘밥을 짓다/*만들다(ご飯を作る(炊く))’ ‘옷을 짓다/만들다(服を作る(仕立てる))’のような状況では, 「ご飯」では「짓다」のみが, 「服」では両方が成立する。

それに対し, ‘공장에서 대량으로 밥을 *짓다/만들다(工場で大量にご飯を作る)’ ‘공장에서 대량으로 옷을 *짓다/만들다(工場で大量に服を作る)’の状況では, 「만들다」のみが成り立つ。鄭(2010)では, 以上のような制作後の所有権の帰属先を根拠に, (15)のように MAKE₁ と MAKE₂ という 2 種類のスキーマを提案した。

他方, 本稿の分析で用いる MAKE タイプは, (15)のように二分したのではなく, 分析の簡略化を図るため, (16)のように統合させたスキーマを用いることにする。そして, 各「述語タイプ」ごとに提案されたスキーマもまた, 本稿の分析に合わせて(16)のように簡略化し, または再検証を行う。

また, (17)のスキーマに書かれた記述用語の言語的記述を紹介し(鄭(2010:97-98)の引用), より詳細な内容に関しては, 3.2 でスキーマによる分析の際にその都度説明を行うことにする。

(17) ACT_x : x が何かをする。

ACT ON_{x,m} : x が m をもって何かをする。ただし, m は材料となる物質(material)。

ACT ON_{x,y} または ACT ON_{z,y} : x, または z が, y をもって何かをする。または, y に対して何かをする。

ACT ON_{x,x'} : x が x'を持って何かをする。

ただし, x' は x に帰属する身体(部分), またはその延長のもの。

BECOME y : y (の変化)が(目の前に)現れる。

BE m : m が存在する。

BE y, y' : y' が y に帰属する。ただし, y' は y に帰属する身体部分, またはその延長の親族関係(誕生によって初めてその関係が発生するもの)

BE y, z : y が z に存在する。または, y が z に帰属する。

ただし, z は物理的場所, 抽象的場所(認識的空間, 抽象的状态など)

BE x, z : x が z に存在する。または, x が z に帰属する。

MOVE x, z または MOVE y, z : x が, または y が, z に移動する。

HAVE x, y または HAVE z, y : x が, または z が, y をもっている。

HAVE y, y' : y が y' をもっている。

MAKE x, y : x が y を作る。

GET z, y : z が y をゲットする。

GET y, y' : y が y' を (受身的に) ゼットする。ただし, y' は y に帰属する身体部分, またはその延長の親族関係 (誕生によって初めてその関係が発生するもの)

3.2. 意味クラス別スキーマの分析

今節では, 2 節で再考察された「派生方向による動詞の意味クラス」を用いて, 意味クラス別スキーマの分析を行う。

3.2.1. (1)他動詞 A・(2)自動詞 A のタイプ

「派生方向による意味クラス」のうち, 「*-i/-hi/-li/-ki* による使役形がある動作動詞」である(1)他動詞 A と(2)自動詞 A を用いて, 「述語タイプ」とそのスキーマに属する動詞への再分類を行うと, 以下の(18)(19)(21)(23)(25)のように, 5 つの「述語タイプ」に属する動詞の分類ができる。そして, そこに現れるスキーマの特徴を検証する。

(18) ACT に属する動詞

スキーマ ACT : ACT_x (身体を使った活動。例：笑う)

[解釈] 動作主 x 自身が身体を使って何かをする。

놀라다(驚く), 웃다(笑う), 울다(泣く), 자다(寝る), 놀다(遊ぶ)

《-i/-hi/-li/-ki による派生の後のスキーマ》

→ CAUSE₁ : ACT ON_{x,y}-BECOME_y (-BE_{v,z})¹⁵ (対象物の状態変化)

놀래다(驚かす), 웃기다(笑わす), 울리다(泣かす), 놀리다(遊ばせる),
재우다(寝かす)

【特徴】動作主自身の身体を使った動作が、派生後に、対象物への状態変化へと変わる。

次の ACT ON₃ のスキーマは、再帰性を持つ動詞に対して本稿が提案するものである。つまり、x が y をもって(または、y に対して)何かをし、その y が z=x に存在・帰属するというスキーマである。

(19) ACT ON₃ に属する動詞

スキーマ ACT ON₃ : ACT ON_{x,y}(-MOVE_{v,z})-BE_{v,z}

(x≠y : 活動・接触・打撃, x=z : 再帰性)

읽다(読む), 보다(見る), 먹다(食べる), 물다(啜える), 씹다((ガムを)噛む), 들다(開く), 벗다(脱ぐ), 알다(知る), 안다(抱く), 핥다(なめる), 긁다(食事を抜く), 뜯다(食む, かじる)

《-i/-hi/-li/-ki による派生の後のスキーマ》

→ CAUSE₂ : ACT ON_{x,y}-MOVE_{v,z}-BE_{v,z}(⇒ACT ON_{z,z'}) (対象物の位置変化)

읽히다(読ませる), 보이다(見せる), 먹이다(食べさせる), 물리다(啜えさせる), 씹히다(噛ませる), 들리다(開かせる), 알리다(知らせる), 안기다(抱かせる), 핥이다(なめさせる), 뜯기다(食ませる), 긁기다(飢えさせる), 벗기다(脱がせる)

¹⁵ 下線は(以下同様)、本稿による再解釈が行われた部分である。

【特徴】動作主 x の活動・接触・打撃という y への動作は、遂行するまでの動作 MOVE_{x,z} が一般的に言語化されていない。(19)の多くの動詞は、x=z という再帰性によって(20a)のようにその言語化されていない部分をどのように解釈するかで、(20b)使役形に対立する主動形(a①)にも、(20c)受身に対立する能動形(a②)にもなれる。

- (20) a. 참새가 지렁이를(①자기 입 쪽으로 가져와서 / ②입을 가져가서) 먹었다.
 (雀がみみずを(①自分の口の方へ持ってきて / ②口を運んで)食べた。) ①主動/②能動
- b. 참새가 지렁이를 새끼에게 (가져가서) 먹였다. (a①に対し)使役
 (雀がみみずを子どものところに(持って行って)食べさせた。)
- c. 참새가 매에게 (매 입이 다가와서) (잡아)먹혔다. (a②に対し)受身
 (雀が鷹に(鷹の口が近づき)食べられた。)

(21)ACT ON₂ に属する動詞

スキーマ ACT ON₂ : ACT ON_{x,x'} (x>x' : 身体を使った活動。例 : 手を振る)
 깎다(散髪する), 감다((自分の髪の毛を)洗う), 빗다((自分の髪を)とかす), 씻다((自分の体を)洗う)

《-i/-hi/-li/-ki による派生の後のスキーマ》

→ CAUSE₁ : ACT ON_{x,z'} - BECOME_{z'} - BE_{z',z} (被動作主の身体の状態変化)
 깎이다(散髪させる), 감기다((人の髪の毛を)洗う), 빗기다((人の髪を)とかす), 씻기다((人の体を)洗う)

【特徴】まず CAUSE₁とは、CAUSE₁の対象物 y を被動作主 z の身体の一部である z' と見なしたものである。派生後の CAUSE₁には、動作主 x による z の身体 z'(の変化)が現れる。

- (22) a. 아침에 일어나서 머리를 빗었다. (朝起きて(自分の髪を)とかした。)
 b. 어머니가 딸 머리를 빗겼다. (母が娘の髪をとかした。)

(23) GET に属する動詞

スキーマ GET : HAVE_{x,y}—ACT ON_{z,y/x,y}—MOVE_{y,z}—BE_{y,z}—HAVE_{z,y}

(能動的/受動的な所有物移動 : (能)第一動作主 = 主語/(受)第一動作主 ≠ 主語)

업다(おんぶする), 잡다(掴む), 끼다((自分の指に)はめる), 들다((自分の手に持つ), 쓰다(被る), 신다(履く), 입다(着る), 이다((自分の頭に)載せる, 担ぐ), 지다((背中に)担ぐ) / 말다(預かる)

《-i/-hi/-li/-kiによる派生の後のスキーマ》

⇒ GIVE : HAVE_{x,y}—ACT ON_{x,y}—MOVE_{y,z}—BE_{y,z}—HAVE_{z,y}

업히다(おんぶさせる), 잡히다(掴ませる), 끼우다((人の指に)はめる), 들리다(手に持たせる), 쓰우다(被らせる), 신기다(履かせる), 입히다(着せる), 이우다((人の頭に)載せる, 担ぐ), 지우다((背中に)担がせる), 말기다(預ける)

【特徴】本稿では、受動的な所有物移動 GET₂に属する「말다(預かる)」も取り入れられるように、GET₁ と GET₂¹⁶ を統合し GET にした。すると、<GET タイプ—(派生の後の)GIVE タイプ>の対立関係が<非使役形—使役形>への対立関係を示していることが分かる。

- (24) a. 아버지가 아이를 등에 업었다. (父が子どもを背中におんぶした。)
 b. 어머니가 아이를 아버지 등에 업혔다. (母が子どもを父の背中におんぶさせた。)

¹⁶ スキーマおよび説明の下線の部分は GET₂の特徴を示す。

(25)MOVE に属する動詞

スキーマ $MOVE_1 : MOVE_{x,z}(-BE_{x,z})$ (動作主の移動)

넘다(越す), 오르다((場所に)上がる), 숨다(隠れる), 타다(乗る),
서다(立つ), 앉다(座る), 눕다(横たわる), 걸다(歩く), 날다(鳥が
飛ぶ)

《-i/-hi/-li/-ki による派生の後のスキーマ》

➔ $CAUSE_2 : ACT\ ON_{x,y} - MOVE_{y,z} (-BE_{y,z})$ (対象物の位置変化)

넘기다(越える), 올리다((場所に)上げる), 숨기다(隠す), 태우다(乗せる),
세우다(立てる), 앉히다(座らせる), 눕히다(横にさせる), 날리다(鳥を飛ば
せる), 걸리다(歩かせる)

【特徴】(26a)のように動作主自身 x の移動動作が、派生後には、(26b)のように対象物への位置変化へと変わる。

(26) a. 아이가 책상 뒤에 숨었다. (子どもが机の後ろに隠れた。)

b. 아이가 책상 뒤에 장난감을 숨겼다. (子どもが机の後ろに玩具を隠した。)

以上、スキーマを用いて、(1)他動詞 A と(2)自動詞 A の動詞の意味クラスの分析を行った。これらの意味クラスには、(派生前は)動作主その物の動作 ACT ON または移動 MOVE 事態に焦点が置かれ、派生後には動作主の動作 ACT ON による対象物の状態 BECOME または位置変化 MOVE が共通のスキーマとして現れていることが分かった(図 6)。よって、前者の図 6 の左側が「自分の領域内に行動が収まる」に、後者の図 6 の右側が「自分の領域外に行為が及ぶ」に対応する明示的意味であると言える。

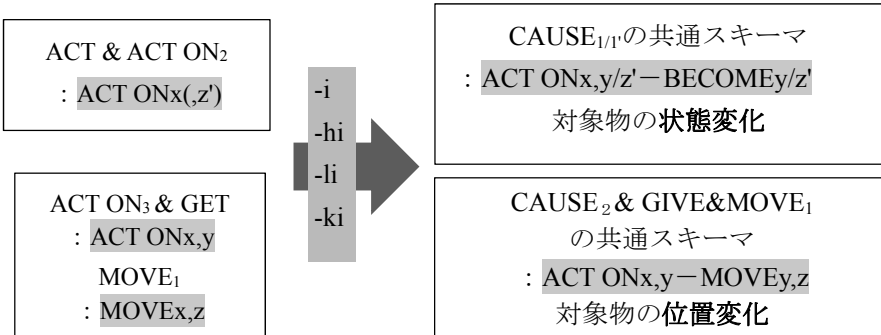


図 6. 他動詞 A・自動詞 A における派生前後の共通のスキーマ

3.2.2. (4)他動詞 B タイプ

次は、「*-i/-hi/-li/-ki*による使役形がない動作動詞」である(4)他動詞 B を用いて、「述語タイプ」とそのスキーマに属する動詞への再分類を行うと、以下(27)MAKE から(35)CAUSE₂までの、5つの「述語タイプ」に属する動詞の分類ができる。これからこの5つの部類別特徴について検証を行う。

(27)MAKE に属する動詞

スキーマ MAKE : ACT ON_{x,m} - BECOME_y - BE_{y,z}

쓰다(書く)

《*-i/-hi/-li/-ki*による派生の後のスキーマ》

➔ BECOME₃ : (MAKE_{x,y} ⇒) BECOME_y (-BE_{y,z})

(創作活動による人工物の生成・出現)

쓰이다(書かれる), 짜다(編む)

【特徴】(28a)の友達と文のように、動作主 *x* の動作によって人工物 *y* が生成される。派生後は、(28b)のように動作主が言語化されず、製作物 *y* のみが現れる。

- (28) a. 친구가 글을 썼다. (友達が文を書いた。)
 b. 오늘은 글이 잘 쓰였다. (今日は文がよく書かれる。→書ける)

(29) GIVE に属する動詞

スキーマ GIVE : HAVE_{x,y}—ACT ON_{x,y}—MOVE_{y,z}—BE_{y,z}—HAVE_{z,y}

(波線は CAUSE₂)

(能動的な所有物移動：第一動作主＝主語)

팔다(売る)

《-i/-hi/-li/-ki による派生の後のスキーマ》

⇒ MOVE₃ : (ACT ON_{z,y/x,y}⇒)MOVE_{y,z}(—BE_{y,z}—HAVE_{z,y})

(受動的な対象物の移動：位置変化と所有物移動)

팔리다(売れる)

【特徴】(30a)のように、動作主 x の意図によって対象物 y が z に渡される。派生後は、(30b)のように動作主 x の意図は言語化させず、対象物 y は z の意図によって x から渡される。

- (30) a. 친구가 나에게 책을 팔았다. (友達が私に本を売った。)
 b. 그 책은 친구에게 팔렸다. (その本は友達に売れた。)

(31) GET₁ に属する動詞

スキーマ GET₁ : (HAVE_{x,y}—)ACT ON_{z,y}—MOVE_{y,z}—BE_{y,z}—HAVE_{z,y}

(能動的な所有物移動：第一動作主＝主語)

걷다(税金など)集める), 낚다(釣る), 뽑다(抜く), 벌다(稼ぐ),
 모으다(集める), 뺏다(奪う)

《-i/-hi/-li/-ki による派生の後のスキーマ》

⇒ MOVE₃ : (ACT ON_{z,y/x,y}⇒)MOVE_{y,z}(—BE_{y,z}—HAVE_{z,y})

(受動的な対象物の移動：位置変化と所有物移動)

걷히다(税金などが集まる), 낚이다(釣る), 뽑히다(抜く), 모이다(集める), 벌리다(もうかる), 뺏기다(奪われる)

【特徴】第一動作主 z((32a)の大家さん)の意図によって、第二動作主 x から対象物 y((32a)家賃)が渡される。派生後に、動作主 x と z によって渡されるまでの移動経緯は言語化されなくなる。

- (32) a. 집주인이 방에 집세를 거두러 왔다.
(大家さんが部屋に家賃を集めに来た。)
- b. 이달 집세가 일찍 긴혔다.
(今月の家賃が早く集まった。→回収された。)

(33) CAUSE₁に属する動詞

スキーマ CAUSE₁ : ACT ON_{x,y} - BECOME_y - BE_{y,z} (対象物の状態変化)

접다(畳む), 꺾다(折る), 찌르다(刺す), 자르다(切る), 찢다(破る), 끊다(切る), 닦다(磨く), 섞다(混ぜる), 쓰다(使う), 파다(掘る), 퍼다(しわを伸ばす), 집다(畳む), 뚫다(突き抜く), 뜯다(剥がす, ばらす), 삶다(煮る), 엮다(結ぶ, 絡む), 나누다(分ける), 열다(開ける), 밟다(踏む), 치다((車などで)ひく), 차다(蹴る), 막다(塞ぐ), 찍다(印を押す, 撮る), 닫다(閉める), 부르다(呼ぶ), 맺다(結ぶ), 조르다(締める)

《-i/-hi/-li/-kiによる派生の後のスキーマ》

⇒ BECOME₃ : (CAUSE₁ : ACT ON_{x,y} ⇒) BECOME_y (-BE_{y,z}) (状態の変化)

접히다(畳まれる), 꺾이다(折れる), 찌리다(刺さる), 잘리다(切れる), 찢기다(破れる), 끊기다(切れる), 닦이다(磨かれる), 섞이다(混ぜる), 쓰이다(使われる), 파이다(掘られる), 퍼이다(しわを伸ばされる), 뚫리다(突き抜かれる), 뜯기다(剥がれる, ばらされる), 삶기다(煮える), 엮히다(絡まれる), 나누다(分かれる), 열리다(開かれる), 밟히다(踏まれる), 치이다((車などで)ひかれる), 차이다(蹴られる), 막히다(塞がれる), 찍히다(印を押される, 撮られる), 닫히다(閉まる), 불리다(呼ばれる), 맺히다(結ばれる), 조리다(締まる)

【特徴】(34a)の彼女と手紙のように、動作主 x が y をもって何かをする。そして、y の変化が現れる。つまり、破れる。派生後は、対象物の状態変化の

みが言語化される。

- (34) a. 그녀가 편지를 찢었다. (彼女が手紙を破った。)
 b. 그녀의 편지가 찢겨 있었다.(彼女の手紙が破られていた。)

(35) CAUSE₂ に属する動詞

スキーマ CAUSE₂ : ACT ON_{x,y}—MOVE_{y,z}—BE_{y,z} (対象物の位置変化)

걸다(掛ける), 달다(付ける), 달다(ぶら下げる, 吊るす), 깔다(敷く),
 덮다(被せる), 놓다(置く), 쌓다(積む), 밀다(左右前後かに押す),
 얹다(上に載せる), 쫓다(追う), 담다(盛る), 바꾸다(換える), 갈다(替
 える), 흔들다(揺らす), 널다(洗濯物を干す), 매다(縛る) 묻다(埋める),
 얹다(上に載せる), 누르다(上から下へ押す), 감다(巻く), 담다(盛る),
 박다(釘を刺す), 쫓다(追う), 밀다(押す), など

《-i/-hi/-li/-ki による派生の後のスキーマ》

→MOVE₃ : (ACT ON_{x,y/z,y}⇒)MOVE_{y,z}—BE_{y,z} (受動的な対象物の位置変化)

걸리다(掛かる), 달리다(付けられる), 달리다(ぶら下げられる, 吊るされる),
 깔리다(敷かれる), 덮이다(被せられる), 놓이다(置かれる), 쌓이다(積まれる),
 밀리다(左右前後かに押される), 얹히다(上に載せられる), 쫓기다(追われる),
 담기다(盛られる), 바꾸다(換えられる), 갈리다(替えられる), 흔들리다(揺ら
 される), 널리다(洗濯物を干される), 매이다(縛られる), 묻히다(埋まる),
 눌리다(上から下へ押される), 감기다(巻かれる), 박히다(釘を刺す)

【特徴】(36a)のように動作主 x が対象物 y をもって行動を起こす。その行動によ
 って, y が z に移動し, z の下に存在する。派生後は, (36b)のように動
 作主は移動の背景となって言語化されず, y が z に移動した結果のみが現
 れる。

- (36) a. 그녀가 어머니 가슴에 꽃을 달았다. (彼女が母の胸に花を付けた。)
 b. 어머니 가슴에 꽃이 달려 있다.(母親の胸に花が付けられている。)

以上、スキーマを用いて、(4)他動詞 B の動詞の意味クラスの分析を行った。これらの意味クラスには、(派生前は) 動作主の動作 ACT ON による対象物の状態変化 BECOME または位置変化 MOVE が共通のスキーマとして現れていて、派生後には対象物の状態変化 BECOME および移動 MOVE に事態の焦点が置かれ、動作主の意図が言語化されていないことが分かった(図 7)。よって、前者(図 7 の左側)が「自分の領域外に行為が及ぶ」に、後者(図 7 の右側)が「自分の領域内に行動が収まる」に意味上明示的に対応していると言える。

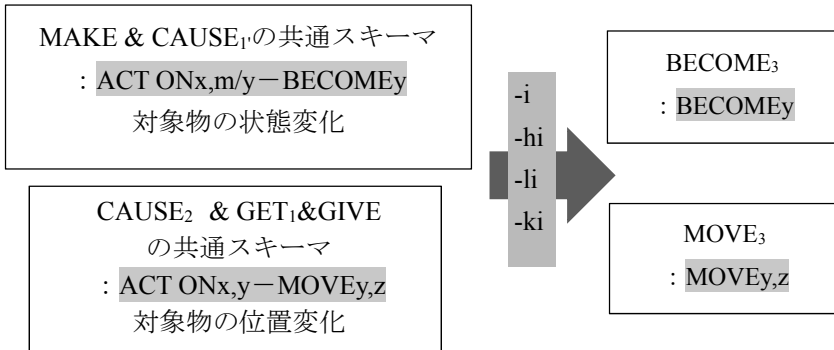


図 7. 他動詞 B における派生前後の共通のスキーマ

3.2.3. (5) 自動詞 B1 タイプ

最後は、「使役形がある非動作動詞」である(5)自動詞 B1 を用いて、「述語タイプ」とそのスキーマに属する動詞への再分類を行い、その特徴を検証する。

(37) BECOME_{1/2} に属する動詞

nada のスキーマ BECOME_{1/2} : (MAKE⇒)(GET2⇒)BECOME_x(-BE_{y,z}-HAVE_{z,y})

나다((汗などが)出る), 나타나다(表情などが現れる), (냄새가)나다((匂いが)する)

《-i/-hi/-li/-ki による派生の後のスキーマ》

➡ CAUSE₁ : ACT ON_{x,y}-BECOME_y (-BE_{y,z})

내다((汗などを)出す), 나타내다(表情などを現す), (냄새를)내다((匂いを)出す)

- (38) a. 더워서 이마에 땀이 났다. (暑くて額に汗が出た。)
 b. 그 사람은 땀을 내며 일했다. (彼は汗を出しながら働いた。)

鄭(2010;107)は、人工物について以下のように述べている。

人工物とは MAKE によって世の中に生成・出現し、我々はそれを GET することによって、我々の手元に出現させ、手に入れることができる。しかし、言語表現(動詞)が表す意味は、この一連の事態の中の極一部にしか対応していない——即ち、(我々の手元に)生成・出現する最後の段階の部分だけを選択的に選んで言語化している——ということである。

この説明と同様に、(38a)の汗も MAKE によって生成され、我々の身体の一部に現れる。一方、派生後には(38b)のように動作主が現れる。

(39) BECOME₃に属する動詞

スキーマ BECOME₃ : (CAUSE₁ : ACT ON_{x,y} ⇒ BECOME_y(-BE_{y,z})) (状態の変化)
 녹다(溶ける), 끓다(沸く), 죽다(死ぬ), 속다(騙される), 끝나다(終わる),
 붙다(くっつく), 썩다(腐る), 삭다(朽ちる, 発酵する), 식다(冷める),
 얼다(凍る), 마르다(乾く), 늘다((量・数など)増える), 부풀다(膨らむ),
 깨다(起きる), 비다(空く), 지다(消す), 타다(燃える), 피다(咲く),
 크다(育つ, 大きくなる), 늦다(遅れる), 맞다(当たる)

《-i/-hi/-li/-kiによる派生の後のスキーマ》

⇒ CAUSE₁ : ACT ON_{x,y} - BECOME_y(-BE_{y,z}) (対象物の状態変化)
 녹이다(溶ける), 썩히다(腐る), 말리다(乾く), …(以下省略)

【特徴】(40a)のように対象物 y の変化が(目の前で)現れる。変化の背景となる動作主は言語化されない。派生後は、(40b)のようにその動作主が現れる。

- (40) a. 물이 끓었다. (水が沸いた。)
 b. 어머니가 물을 끓렸다. (母が水を沸かした。)

(41) MOVE₃に属する動詞

スキーマ MOVE₃: (ACT ON_{x,y/z,y}⇒)MOVE_{y,z}-BE_{y,z}(受動的な対象物の位置変化)
 오르다((物価などが)上がる), 들다((シミなどが)入る), 차다(満ちる),
 지나다((時間などが)過ぎる), 날다(埃が飛ぶ), 옮다(風邪・癖などが移る),
 일다(生ずる,起こる), 솟다(力などが沸く) 분다(水ぶくれする,増す),
 뜨다(浮く), 돈다(感情などが沸く)

《-i/-hi/-li/-kiによる派生の後のスキーマ》

⇒CAUSE₂: ACT ON_{x,y}-MOVE_{y,z}-BE_{y,z} (対象物の位置変化)

【記述】 動作主 x が y をもって何かをする。そして, y が z に移動し, z に存在する。

【特徴】 背景となっていた動作主が言語化される。

例)올리다((物価などを)上げる), 들이다((色などを)入れる→染める), 옮기다(移す), …

【特徴】 (42a)のように, 受動的な対象物(ここでは口癖)の位置変化であるが, 派生後に, (42b)のように, 動作主による能動の対象物の位置変化に変わる。

(42) a. 친구에게서 말버릇이 옮았다. (友達から口癖が移った。)

b. 친구가 나에게 말버릇을 옮겼다. (友達が私に口癖を移した。)

以上, (5)自動詞 B1 の意味グループは, 大きく(39)状態変化動詞と(41)位置変化動詞に分けられ, それぞれ前者は BECOME₃, 後者は MOVE₃ のスキーマが対応している。そして, (40)と(42)のような構文は, 派生の前には言語化されていなかった ACT ON_{x,y} が, 派生の後に動作主 x によって言語化されるという共通の特徴を持つ。

すなわち, (5)自動詞 B1 の意味グループは, 「動作主 x は言語化されずに対象物の状態および移動の変化のみが現れていること」と「動作主 x の動作 ACT ON_{x,y} による対象物の状態および移動の変化」との対立関係が, 「内」と「外」のような対立関係を示すことが明らかになった。

(43) BE₈/ BE₉ に属する述語

スキーマ BE₈ : (CAUSE₁⇒) BE_{y,z} (状態変化を被った対象物の存在)

BE₉ : (CAUSE₂⇒) BE_{y,z} (位置変化を被った対象物の存在)

높다(高い), 낮다(低い), 넓다(広い), 좁다(狭い), 밝다(明るい),
붉다(赤い), 더럽다(汚い), 늦다(遅い), 굳다(堅い), 굽다(曲がっている), 곧다(まっすぐだ), 없다(無い)

《-i/-hi/-li/-ki による派生の後のスキーマ》

➔ CAUSE₁ : ACT ON_{x,y}-BECOME_y-BE_{y,z} (対象物の状態変化)

CAUSE₂ : ACT ON_{x,y}-MOVE_{y,z}-BE_{y,z} (対象物の位置変化)

높히다(高くする, 高める), 낮추다(低くする), 넓히다(広げる), 좁히다(狭くする), 밝히다(明るくする), 붉히다(赤くする), 더럽히다(汚す), 늦추다(遅らせる), 굳히다(堅める), 굽히다(曲げる), 곧추다(まっすぐだ), 없애다(無くす)

【特徴】 BE₈ では、まず(44a)のような「部屋」は(言語化されていない動作主によって)すでに状態変化を被った対象物の存在だと考え、そして BE₉ では(45a)のような「建物」はすでに位置変化を被った対象物の存在だと考える。派生後には、(44b)と(45b)のように、動作主が言語化され、その動作主によってそれぞれの対象物が状態変化、または位置変化を行う。

(44) a. 방이 더럽다.(部屋が汚い(または、汚れている)。)

b. 아이들이 방을 더럽혔다.(子ども達が部屋を汚した。)

(45) a. 건물이 높다. (部屋が広い。)

b. 건물주가 건물을 높였다.(父が仕切りを壊して部屋を広げた。)

以上、スキーマを用いて、(5)自動詞 B1 の動詞の意味クラスの分析を行った。これらの意味クラスには、(派生前は) 対象物の状態変化が BECOME & BE で、位置変化が BE & MOVE で表れ、動作主の意図は言語化されない。 それに対して派生後は、共通して動作主の動作 ACT ON による対象物の状態変化 BECOME または位置変化 MOVE 全てが言語化されることが分かった。 (図 8)。よって、

前者(図8の左側)が「自分の領域内に行動が収まる」に、後者(図8の右側)が「自分の領域外に行為が及ぶ」に対応する明示的意味であると言える。

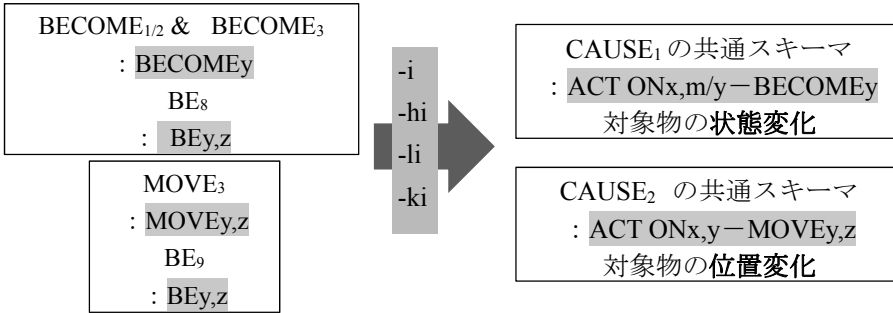


図8. 自動詞 B1 における派生前後の共通のスキーマ

なお、能動文－受動文のような意味の対立を成していない(9)自動詞 B2 タイプについては、2.2.2 の意味検証をもって述語タイプとそのスキーマによる検証を省略する。

4. 周辺問題

最後に、第2節の(9)のうち、「졸다(居眠りする, nod off)」について検証を行う。

「열다(実が実る)」の意味の中心には自然の力が関わっていて、状況によって人間が関わることもできる((11)(12)参照)。それに対し、「졸다(居眠りする)」は、人間による非意図的動作である。鄭(2008;13)では、(47a)が非文になるということについて言及しているが、その理由については触れていない。派生方向という本稿の話題から少し離れる議論になるが、ここで本稿の立場を少し述べることにする((46b)(46c)は標準国語辞典から、(47a)は鄭(2008)の(44b)からの引用である)。

まず韓国の標準国語辞典および国立国語院の見解¹⁷では、「졸리다(眠たい)」について、(46a)は動詞であり、(46b)と(46c)は形容詞として説明されている。しかし、そのような分類では「아휴 졸린다 졸려.(いや～眠い眠い。)」のような反復動詞についてその説明ができなくなる。

本稿では、「졸리다(眠たい)」は、動詞「졸다(居眠りする)」から派生したものであるため、(46a)と(46d)のように動詞として統語的な振る舞いを有し、それと同時に意味上形容詞化したものであるという見解を表明する。

(46) a. 졸린다./b. 아휴 졸려./c. 졸린 표정/d. 졸리는 표정

(a.眠たい。/b.いや～眠たい。/(c,d共に)眠たい表情)

(47) 그 학생이 *a. 졸린다./b. 졸려하고 있다./c. 졸고 있다.

(この学生が*a.眠たい。/b.眠たがっている。/c.ウトウトしている。)

(48) 彼が*a.眠たい/b.眠たがっている・居眠りをしている。

(49) He is a.sleepy. / b. nodding off.

さらに、韓国語と日本語では、「悲しい・痛い」などのような感情形容詞を用い、話者の視点から3人称主語の感情について直接述べることができないという感情形容詞の人称制限がある。つまり、(53)のような英語とは異なり、(51a)や(52a)は非文となり、(51b)や(52b)のようにそれぞれ「-어하다(～と思う)」・「～がる」の表現形式が必要である。

(50) 슬프다. (悲しい)

(51) 그 학생이 *a. 슬프다./b. 슬퍼하고 있다.

(52) 彼が*a.悲しい/b.悲しがっている・悲しんでいる。

(53) He is sad.

¹⁷ 韓国の国立国語院の「온라인가나다(オンライン・カナダ)」で「졸리다(眠たい)」について検索すると、「졸리다(眠たい)」について解釈の混乱が生じていることがうかがえる。

すなわち、(47a)が非文になる原因は、「졸리다(眠たい)」の意味上形容詞として機能し、感情形容詞と同様に人称制限が関わっているからと考えられる。よって、「-어 하다(～と思う)」・「～がる」の表現形式をもった(47 b)(48b)は、(51b)(52b)と同様に成立するようになる。

派生の方向から表面的に動詞としての統語的痕跡を維持しつつ、意味的側面は形容詞になっている「졸리다(眠たい)」がもつ両面性から、(46c)と(46d)の間で意味の対立がないことの理由も説明ができるようになる。

5. おわりに

本稿では、まず第2節で、崔(2019a)で設けられていた初中級レベルへの制限を外し、延べ154個の述語を対象に「接辞*-i/-hi/-li/-ki*の派生構造」による動詞の意味クラスの再考察を行った。そして、第3節では、鄭(2010)が仮定する「述語タイプ」の種類とそのスキーマを援用し、動詞の意味クラス別に見られるスキーマに共通する「述語タイプ」から、派生の方向を意味する「自分の領域内に納まる、または、外に及ぶ行為」という「内」と「外」の概念を明示的に示した。結果は、以下の3点にまとめられる。

I) 「*-i/-hi/-li/-ki*による使役形がある」動作動詞である(1)他動詞Aと(2)自動詞Aの動詞の意味クラスは、動作主その物の動作(ACT ON)または移動(MOVE)に事態の焦点が置かれている。この特徴を「自分の領域内に行動が収まる」ことに対応させると、派生後の動作主の動作(ACT ON)による対象物の状態変化(BECOME)または位置変化(MOVE)である特徴が、「自分の領域外に行為が及ぶ」として表れる。

II) 「*-i/-hi/-li/-ki*による使役形がある」非動作動詞である(5)自動詞B1の動詞の意味クラスは、対象物の状態変化(BECOME & BE)または位置変化(BE & MOVE)のみが表れ、動作主の意図は言語化されない。この特徴を「自分の領域内に行動が収まる」ことに対応させると、派生後の動作主の動作(ACT ON)によ

る対象物の状態変化(BECOME)または位置変化(MOVE)全てが言語化され、「自分の領域外に行為が及ぶ」として表れる。

Ⅲ)「*-i/-hi/-li/-ki*による使役形がない」動作動詞である(4)他動詞 B の動詞の意味クラスは、動作主の動作(ACT ON)による対象物の状態変化(BECOME)または位置変化(MOVE)が共通のスキーマとして表れる。この特徴を「自分の領域外に行為が及ぶ」ことに対応させると、派生後の対象物の状態変化(BECOME)または移動(MOVE)そのものに焦点が置かれ、動作主の意図が言語化されていない特徴が「自分の領域内に行動が収まる」として表れる。

(金沢大学非常勤講師)

参考文献

- 崔チョンア(2019a)「韓国語の動詞接辞*-i/-hi/-li/-ki*を用いた使役と受身の学習—派生の方向と動詞の意味クラスに基づいて—」,『言語文化論叢』第23号, pp. 73-96, 金沢大学国際基幹教育院外国語教育系.
- 崔チョンア(2019b)「韓国語の使役接辞を用いた使役構文について—日韓対照研究の観点から—」, 論集『北東アジア諸言語の記述と対照』, pp. 121-136, 新潟大学文学部.
- 鄭聖汝(2008)「使役と受身の曖昧性はどこからくるか?—韓国語の動詞接辞*-i/-hi/-li/-ki*の機能を求めて」,『大阪大学大学院文学研究科紀要』第48号, pp. 97-166, 大阪大学.
- 鄭聖汝(2009)「非意図的事象と他動詞構文—『所有』か『責任』か, それとも?—」,『日本語文法』9-2, pp. 53-69.
- 鄭聖汝(2010)「韓国語における他動性:プロトタイプ理論から見たカテゴリーの内部構造と非規範的構文」,『大阪大学大学院文学研究科紀要』第50号, pp. 91-152, 大阪大学.
- Haiman, John (1983) "Iconic and Economic Motivation", *Language*, vol. 59, no.4, pp. 781-819.

- Langacker, Ronald W. (2000) (坪井栄次郎(訳)(2000)) 「動的使用依拠モデル」 『認知言語学の発展』, pp. 61-143, 東京: ひつじ書房.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization*. 3rd edition. London: Oxford University Press.
- Pulman, S.G. (1983) *Word Meaning and Belief*. London: Croom Helm.
- 角田多作(1991) 「第 5 章他動性」, 『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語』, pp. 67-93, 東京: くろしお出版.
- Yeon, Jae-hoon (2011) 『한국어 구문 유형론(韓国語の構文類型論)』, pp. 89-188, kyonggi: 太學社.
- 国立国語院(2005) 「第 12 章使役・被動」, 『외국인을 위한 한국어 문법 1 (外国人の為の韓国語文法)』, pp. 255-281, Seoul: CommunicationBooks.

参考資料

- 国立国語院(2017) 「한글 맞춤법(ハングル正書法)」, 文化体育観光部告示, 第 2017-12 号.